
放課後は彼氏と寄り道を

優美香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後は彼氏と寄り道を

【Nコード】

N4659X

【作者名】

優美香

【あらすじ】

「ノクターンノベルズ」「小説家になろう」内で連載している【放課後、彼女にキスしよう】の作者の活動報告の転載、並びに、日々の雑感を綴って行きたいと思っています。

「信者」でもいいじゃない (固定愛読者という有難い存在について・改題)

ちょっと前に「ラノベを軽蔑すんなバカにすんな」と、某SNS上でネチネチ因縁を付けられていた話は、活報欄でサラッと致しました。

そういう時、大概の人は私の対応の仕方を見ていると思うので、あそこの上では何とかオトナの対応をする訳で……。

因縁ワナビ様が個別メッセージまで使って、謝罪と賠償を要求していた直後。

ここ「なるう」にも登録していた読み専A氏。
仰ってました。

「あの人、プロの作家になりたいんですよね？」

作家って【通りすがりのその人！あなたの心を掴んでみせる！】って頑張るものなんのではないでしょうか。

わたしが彼の内輪だけで盛り上がっている小説コミュを見ました。
【読者よ！おまえら俺の心を掴め！】ですね。
わたしは彼の作品を読みましたが、こちらの心に訴えてくるものが何もなかった。

まして、ゆみかさんが、あの日記で仰りたかった意味を深く捉えようとはせず、言葉の表面だけで因縁付けているだけです。

あまり、気を落とされないように「

A氏が、スパツと言った「読者よ俺の心を掴め！」は、名言だと思う。

私は、その心根が透けて見える小説が嫌いだ。

・・・このA氏と自分は、面白い縁で繋がっている。

A氏が体を壊して、自宅で休んでいたときのこと。

A氏の友人が「本屋にも行けないんだったらネット小説もあるよ」と教えてくれたとのこと。

たまたま拙作に眼を留めた時に、次回更新予告を私は後書きに付けていた。

「へえ」

予告日に覗くようになり、心待ちにして下さるようになった。

某SNSは「共通の友人」が表記される仕様になっている。その「共通の友人B氏」と私が遣り取りしている時「横レスすみませんが」と入って来たのがA氏であった。

「あ、どうぞどうぞ」と三人で盛り上がったw

しばらくしてからA氏と私はマイミク同士になった。

たまたまツイッターも、なさっていらっしやること分かり、そこでも遣り取りするようになった。

これまた少し経ってから。

「えっ？あの人、放課後の作者の人だったの？」

と思ったそうである。

それからマメに私の宣伝をして下さるようになった。
本当に有難いことだと思う。

他にも、放課後を書き始めて、それまでと比べて（やっぱり初回から、性描写がないと読み手の人は付いてきてくれないのかな）など。

あまりの反応の無さに毎日、涙ポロポロこぼしていた頃。

読書家で眼の肥えた年上のマイミクさんに「最近こんな書いてるんです」と、恐る恐る紹介してみたところ。

（悪いことがあったら、まず狭い範囲の顔が分かる人に指摘して欲しかったから）

「不覚にも僕は泣いた まさか18禁小説で泣くななんて思った」

そんな言葉を頂いたこともある。

……こっち「もっとエグい作品が欲しいんだけど」と言われると
思っていた。ドキドキ。

勿論、「高校生の話よりも余呉さんみたいなオトナの話が読みた
いす」。

そういつつ、いつも仕事の帰りにケータイから放課後を読んで

くださっている男性既婚読者もいる。

挫けそうになるとき、私が思い浮かべるのはそういう人たちの顔である。

そんな人たちの多くは「なるう」「登録まではしていない。めんどくさがりなのだw作者自身もそうだからよく分かる。類は友を呼ぶのであるwww

どんなに言い繕っていても、ネットに小説を上げている人間は

「目立ちたい」

そういう欲が毛筋ほどもないとは言わせない。それが自然な姿だろうと思う。

目立ちたい欲望が自然に備わっている欲求ならば、ある程度の期間が経った時期からは他者の作品に眼を通さないはずがない。

だって目立ちたくないなら自分のブログで書いてたらいいことだもん。

目立ちたくないけど「なるう」「ノクタ」でポイント沢山あったら嬉しいよね。それが普通。

私だってちよつとでも目立ちたいw

だから現在「ノクターン・ピックアップ作品」の中に入って嬉しいもん。

今、ノクタの上位を席卷している方々は凄いと素直に思う。

例えたら ジャニーズみたいな感じ。

きらびやかで、眩しくて。その人達はホントに凄い。

その人達だって、もしかしたら自分の地位を守る為に必死なのか
もしれない。

王者というものは孤独なものだ。

だけど、そこから外れている人の作品群だって、キラキラしてる
ものは沢山ある。

私は「あ、読みたいな」と思った作品があつたら、まず感想欄か
ら眼を通す人間なので、その欄に書いてある文章と、それに対し
ての作者の反応を見てから、作品を読むことにしている。

勿論、私は体ひとつしかないしw見逃しているキラキラは沢山あ
る。

そこで思う、

ジャニーズの人たちはジャニーズの人たちの御苦労がある。

でも、私なりに私の器量で、泥臭ーいことをしているのは事実。
でないと読者増えないじゃんwポイントも増えないじゃんwww

(自嘲)

(毎日、母親とキャベツばかり食べていた頃の八代亜紀さんのよう
に。

もつと言えば……。

毎日毎日、何百と自腹を切ってカセットテープにネタを録音して、
雨の日も風の日も、奥さんと一緒に高速道路のサービスエリアに立
ち、観光バスの乗降客や運転手さんに、それを手配りしていた綾小
路きみまるさんみたいに)

とある場所で私の作品がランキング上位にいることは、八代さんや、きみまるさんが陽の目を見たと同じことだと思っっている。

私が告知して愛読者が動く。普通じゃないのかな……。なるう登録とか面倒な手間も要らないんだったら、余計にポチッとするやる普通w

ホントはこの話、するかどうかが散々迷っていた。総合ポイント4桁ジャニーズ集団からみたら

「なんでアイツの作品がランキング上位なんだよ」と思うことは必至だろう。

自慢話にしか読めない方々もいるかもしれない。

それは仕方ない。

だけど私の営業努力も、ちょっと分かって下さいね。お願いします^^

「信者」でもいいじゃない (固定愛読者という有難い存在について・改題)

18禁カテゴリになりますが「のくむん雑談所」名義で「おばかさ
ん」という作品を書かせて頂いています。苦勞した人、傷ついた人
が報われる人生であって欲しい、そんな気持ちをいっぱいに詰めた
作品です。

日本語を綺麗に使いたいと思う今日此の頃

書き言葉と話し言葉は違う。

書き言葉では、男女の性差やキャラの口癖も、興奮した時の口調や穏やかな時の口調も違う。

話し言葉でも、そうでしょうか？

教師や上司、親に対しての言葉遣いや、友人同士でのオシャベリの時。

全然、違うものだと思う。

又、私個人のことではありますが。私の家族は非常に言葉遣いが汚い、乱暴な家族だった。

そんな家族が「優しさ」「礼儀」「節度」などと教えてくれる訳もなくwそりゃもう大変。

だから、ある程度、自覚して直せるようになったのは、十代の後半くらいから。

非常に苦労しました。

そんな私は、やはり「言葉遣い」の綺麗な人に男女問わずに憧れる。

T・P・Oの使い分けが出来る人とかね。

そう思っているのが原因なのだろう、時々、自分よりも若い人の言葉遣いにビックリすることがある。

乱暴なだけなら、まだいい。

汚いのだ。

で、目上の人にも当然、それで話を進める。

それはちょっと引くなあ……。

やはり、日本人として生まれたからには、綺麗な日本語を使っていたいし、使えるようになりたいと切に思う。

綺麗な日本語の並べ方、選び方が出来る作家さんは無条件に尊敬してしまう。

「なるう」では展開が遅くてすみません、スピンオフの話

おはようございます。

今、家の前で破裂した水道管の工事をしてますorz

拙作「放課後、彼女にキスしよう」、コレ苦しいけど大好きな作品ですね。

手を掛ければ掛けるほど、それだけ良くなるというか。

おそらくあまり目立たない作品ではありますが（笑）。

さて。この作品のスピンオフを、先日、18禁男性専用カテゴリにアップさせて頂きました。

タイトルは「彼女のおっぱいは僕のもの！」です。

元々、「放課後」は、それぞれのキャラの骨格を据えてから描きはじめた作品です。

実は成人してからの年表も作っているんです（ネタバレ）。

「放課後」本編/18禁男性専用カテゴリ連載……コレが進んで行くうちに、他の子も出してあげたい、早く出してあげなくちゃ、そう思っていた時に「参加募集、短編小説企画！」という文言が眼に留まったんですね。

いいもの、みつけた

最初はこう思って参加表明したのですが……（以下、略）。

……しかし近藤って、そんなにイイんだらうか？

あいつ兄弟多いし、家族の中でも長男だから、それなりにリーダー

ーシップみたいなのは有る。

由佳を前にすると、部活中とはまるきり違ってヘナヘナになっちゃう。

作者自身は柳楽が好きですね。

無愛想で、言葉が足りなくて。人付き合いが下手で。けど気持ち誰かに優しくなりたい、みたいな。

柳楽は、もうちょっと長く丁寧に書きたい。ちゃんとした恋愛の連載にします。だから今、体が三つくらい欲しい。

今、近藤のストーリーを一生懸命、丁寧に作っているのは、キャラが共有する時系列の齟齬がないようにしていたいから。

スピノフで書かせて頂いた鳥飼さんは、近藤とは違った「真面目さ」と、近藤にはない「融通の利かなさ」はありますね。

んでもって、そのスピノフの中で、石井先生と女生徒との恋愛もさり気なく匂わしていると言っね（笑）。

本日の「一度でいいんですっ」

私は今、18歳以上の年齢対象のところ「ノクターン」で、連載を続けています。

……余談になりますが、元々、人生で初めて仕上げた初作も「ノクターン」に投下したせいもあり、そこで、タイトルの目新しさもあったのか、内容の設定が「議員と秘書」というものだった為か、割とすぐに「お気に入り」が固まって付いたんですね。

嬉しかったですよ！ そりゃあもう。二作目もそうでした。

さて話を戻して。

そこも「なるう」と同じように「異世界ファンタジー」が主流です。

そこに作品を投下し始めた今年の3月頃は、全然そんなのが分からなかった状態でした。

ちよつとずつ、周りを見る余裕が出て来たら「こんなに一杯あるの？」とビックリしたくらい。

正直言つて「なるう」の作品もあまりにも数が多くて、当時は全然まったく、眼を通す気分にはならなかったです。「放課後、彼女にキスしよう」の更新を48時間毎に設定していたせいもあります。

他の人の作品を見る余裕なんか無い無い。

何でも、2009年の9月に規定が変わって云々……というお話を、前からいらっしやる方から最近伺ったのですが、「今、この状

態」なんだから仕方ない。この状態の中で勝負を掛けた訳ですから。「自分の文章は、どれだけ他人にアピール出来る能力があるんだろう?」というね。女性専用の18禁サイト「ムーンライトノベルズ」もありますけれども、敢えて私は男の人ばかりのところに向かった。その理由を書くのはまた後日ということに致します。

とにかく御蔭様で「ノクターン」の中では決して派手な存在ではないと思うけれども、その代わりに、地道に、愛読者の方々を拾い上げて来たという自負があります。

で、「異世界」「ハーレム」「チート展開」ですよ(笑)。

素直に告白すると、私は、これらの言葉は嫌ってましたし、安易に頼らずに「地に脚を付けた小説を描きたい」と思っていました。

でも、此の頃、そんな風に頭ごなしに嫌いだから読まないとか、嫌いだからチャレンジしない、とか、それも損かなーと思うように変わっていました。

5月6月頃は、傲岸不遜に思っていましたからね。

「こんなファンタジーなんか、有得ないものがウケてるなんて、有得ない。ハーレムなんて！ は、ハーレム！！ 非道德的なものが？ 性描写だけならともかく？ どこが私と違うのか分からない」

その秘密が知りたいと猛烈に思うようになりました。

そんな感情がキツカケになって、とりあえず名前が上方向に上がっている作品に眼を通して行きました。

打ちのめされちゃいました

異世界チーレムでも、面白いものは面白い。ハーレムであっても「どうせフィクションの世界なんだしーい」などと、思いながらキャラクターに共感したり、呆れたりできるものはできる。

「ちっ」

舌打ちしてたって体と脳味噌は正直なもので、空いた時間で自分の小説と全く毛色が違うものを読んだりしました。

完敗でした キャハ

……やはり、上位にある作品は、上位にいるだけの理由はあるのです。あ、勿論、狭量な私の価値観で「中身サッパリこれ、だめじやん」つてのもあります（笑）。く、口が裂けても言わないんだからねっ（笑）。

それでもやはり「赤の他人様に「評価ポイントをつけさせ」「お気に入り登録させ」という、すごい手間ヒマ」を掛けさせる価値があつて然るべき作品が、上位には来ている。

それはなんだろう？

そう思って、また角度を変えて必死で、無い知恵を振り絞りながら、自分との差異を探して行っている過程の途中ではあります。現在在は。

けど、そうやっていたことは、結果的に凄く良かったと自信を持つて言えます。

次の欲が出てきたから。

私は、一作でいいから総合ポイント4桁を叩き出してみたいです。実情、大体、「お気に入り」が100件あれば、何人かは必ず、文章やストーリー評価をつけて下さる方はいらっしゃるので、総合で300ポイントを越えることが分かりました。

どんなにスマートな性格の人であっても、「自分の作品を上位ランキングに入れたい」欲は必ずあるはず。生身の人間ですから、修羅の生命はあるのです。逆に、少し話は外れますが、生身の人間に修羅の命があるからこそ、文明は発達してきたのです。はい、言い切ります（笑）。

文章やストーリーを誰も評価してくださらなくても、ついつつかり「お気に入り」登録してくださった方が500人いれば4桁達成です（笑）。

極端な話、それでもいい。

一度、そこまでのラインに自分を押し上げてみたい。

何故、そこまでこだわるのかって？

そしたら、「ノクタという市場で、沢山の人を振り向かせるテクニク」が身に就くでしょう？

それは絶対に、今後の自分にも役に立つと思うから。だからやってみよう。

今、真剣にそう思います。

他人様の作品にレビューを付けるのは難しい

他の方々の短編や連載を拝読していて「ん？」と思う時があります。

(もしも私が、この小説が紙ベースになって、本屋さんに並ぶ時の帯の文章を任されたら、なんて書くだろう?)

もくもくイメージだけが湧き上がります。自分勝手な妄想の一言に尽きますけど(笑)。読み手の立場になると、そういう遊び方もできるのがいいと思います。

作者の方から「レビューなんて書いてくれとか頼んでねえから消すぞこのヤロー」などと言われたら、確実に泣いちゃいますけど、幸い、レビュー初体験をさせていただいた方は、拙レビューを削除なさっていませんから、すごく嬉しいです。

前回にも書きましたが、今の自分は新しいことにチャレンジするために、少し手を伸ばせばできそうなことは、なんでもやってみたいと思っています。

たまたまですが、以前に「いつか自分に短編のレビューを書かせてください」と、こちらから申し出た方がいらっしやいました。

オッケーが出ても、すぐには取り掛からなかったのです。かなり長く放置しておいて、遂に(笑)昨日の夜に、仕上げてアップした次第です。

今日の朝に見たら、誤字などが見つかったため、削除したり推敲

し直したりして、再アップ致しました。
だいぶコンパクトになりました（笑）。

だいたい、他人様の作品に「感想を書きたい！ここに、この作品が心に留まったヤツがいることを、作者さんに伝えたい！」と思っても、たかが感想一行書くのに、何時間も、つまらないことで悩んでしまう性質の人間です。

「こんな書き方したら、読んでくれる人が不愉快にならないだろうか？」とか。ほんつとに悩みます、やはりオープンになっている場所でもありますから。感想欄って。

レビューはそれよりも遥かにハードルが高いですね。

けど、たまに、感想を書くことじゃなくて「あたし、この作品の売りに関わってみたい。もしも関われるなら、どんな言葉を帯に書こうかな……。どんな言葉が対外的に「おっ？」と、モニタの向こう側の、人の目を留めてくれるんだろう」と、異様に執着が湧く作品があります。

昨日、こちらが勝手に書いたレビューは、自分的には、ものすごく気に入っています。

「くはあ！あたしって、やっぱり文章書くことしか取柄ないわ！とか思っちゃったくらい。ビシビシ決まりました。それを読んだ作者さんが、消すのも消さないのも自由だと思っています。こっちが勝手にやらかしたことなので（笑）。

ものすごく大変だったけど、「いいですよ」とレビューを書いてみたいと申し出た私に、お返事をくれた作家さんに感謝しています。

お勉強をさせていただいて、ありがとうございました。

酔って候

これマジでほんとの話なんだけどさ。

昔さあ

芦屋の美男美女の夫婦が顔見知りになっていた訳よ。

確か酒屋さん経営してたと思うんだよ。

子供もお人形さんみたいな、ほんと可愛い女の子でさあ

「あー、この人たちっていいな。何の苦勞もしないで生きてるんだな」

そう思った訳。

なんであたしばかり苦しい目に あたしばかり あたしばかり

ものすんごく卑屈な時期でね

そんなとき、知ってる人に誘われて

ちっちゃい子供が音楽会やるから来てくれって

枯れ木も山の賑わいだからって

まあ日本語の使い方わかつちゃいねえと思ったし

そんな余裕ねえよとか思った訳 あたし。

それこそ「着て行く服がない」だよ。

でもしょうがないから行ったさ

そしたら 芦屋の美男美女夫婦が来てんじゃん

なんで？隣の市なのに？って思ったよ

保育所の空きがないからこっちに来ていたみたいだね。

そんでわざわざ隣の市まで音楽会かよ アホかとバカかと。

日曜日なのに。

そしたらさあ

すごい物静かで知的なキレイ可愛い、芦屋奥さんの膝の上に

明らかに重度の脳性マヒの男の子が寝てんの。

まばたきする顔とか、もうほんとと脳性マヒの子供さんなの。

えっ って思ったよ

自営業で不安定かもわかんない家計かもしれないけど

賢くって美人の奥さんと 優しい男前の御主人と

えくぼが可愛い、お人形さんみたいな御嬢ちゃんと

絵に描いたようなホームドラマのテンプレート家族に

いきなり生まれてきた脳性マヒのお坊ちゃんだよ

その日は晴れていて、陽の光が、美人妻の全身を照らしていた。

あたしには後光が射しているのかと思った。

美人妻「おかあさん」は静かな笑顔で、ずっと子供のお遊戯と
か見ててさあ

もう、ほんっと。静かな笑顔なの。

この夫婦はここまで来るのにどれくらいの悲しみを乗り越えたんだ
ろう。

これから先にどれくらい覚悟を決めて行かないとならないんだろ
う。

そう思ったらさあ

あたし泣いてたよ、人の眼がいつぱいあんのにさあ。

ばかみたい。

恥ずかしかった。

けど思った。他人の見えない苦勞を察することができ自分になりたい。

見えない努力を感じられる人になりたい。

なんにもないよ、あたしの掌の中は。だけど

そう思ってしまった強烈な出来事は

驕っているときに姿かたちを変えて、静かな笑顔で、自分を叩く訳よ。

忘れちゃいませんか ってね。

命短し、恋せよ乙女

いやー、昔の人はイイこと言うねえ……。

しみじみ思う今日此の頃。こんにちは。優美香です。

今朝、鏡を見てビビツちゃいました。白髪発見です（汗笑）。もうそんな歳なのかと。いやいやまだまだ頑張れる。うんうん、なんつって独り言を繰り返しておりますです。

タイトルに致しました名言「命短し、恋せよ乙女」。コレって真実だと思っんです。若いからこそその純情のカタチがある。瑞々しい感性や、頑として折れない心、傷つきやすくてどうしようもない青さとかですね、そこから自然に任せてほとぼしる生命力がなければ、感応しあえないゆらぎみたいなもの。

誰に問われるまでもなく愛しい人の名を語る。

そんな一瞬は、とても貴重です。

今思うと、そんな感受性が人生を支えているような気も致します。

話は少しズレてしまいかも分かりませんが、昨日の夜、裏口の扉を開けて山の方向の住宅街を眺めておりました。

色んな灯りが散らばっています。

私は小学校時代を青森県で過ごしたのですが、当時の修学旅行の行き先は、北海道の函館だったんですね。函館と言えば夜景です。

おぼこい小学生ですから、朝早く市場に行つて日本酒をちびちびやりながらウニやイクラで丼をたらふく食べたり、自由時間にラーメン食べ歩きとか無いんですけど（笑）。

函館山から見下ろす夜景は、まさに宝石をあちこちに撒き散らしたような美しさです。

子供心に、その光景は脳裏に焼きついて離れないものですね。

昨日の夜、小高い山の頂に向かって伸びる灯りの束は「思い出補正」がある函館の夜景に比べたら、確かにスケールはシヨボイ（笑）。

でも私は、いいな、と思つて眺める。その時間がとても好きです。

もう多分、二度と戻ることはない下北半島の地から見える海の色や、カラッとした風の冷たさや、寂れかけた町の夜景が何故か心に引つ掛かつてくる。そんな季節が、自分にとっては今頃です。

どんな方にとつても、どんな街の夜景でも、心を癒すものなのではないでしょうか。

街の灯り。一軒一軒、迫つて行つたら、その下では色んな景色があると思います。

家族や恋人と。ひとりで。様々な過ごし方もあると思います。激しい憎しみもあるだろうし、諦めや絶望もあるかもしれないよね。泣いたり笑つたりも当然。ささやかで滅びかけそうな心を震わせてくれる、こまやかな優しさも愛もあるでしょう。

一軒一軒、灯りの下の風景は違っけれども、それを俯瞰で見たら「綺麗だな……」と思うのは人の本能であるかもしれせん。

劇場で観た香港映画、アンドリュー・ラウ監督の「傷城」で、何気ないカットではありますが「監督は何故に私のツボ所を知っているのん？」と思っただ箇所があります。

だだっ広いフローリングの部屋には電気が点いていません。暗い部屋の壁際にあるパイプベッドに、ぽつんと腰掛けて俯いている俳優がいます。

ちょうど頭の方の壁面にあたる部分が、全面、おそらくベランダの設定なんです。大きな窓ガラスとサッシを隔てた向こうには、一面に広がる香港の夜景。本当に、ごく一瞬のカットです。そこに広がる沢山の街の灯と、俳優の演じる孤独な役柄がピタリと当てはまっています。

痺れました。

（ああ、そうそう！ これなのよコレ……！）
なんてね。

まあ、恋に限らず。（アレ？）こういう感受性を、持ち寄って温めあえる人を、男女問わず自分の周りに置いておきたいですね。

才能なんて言葉、だいきらいっ。

タイトル通りの心境です（泣笑）。

なので、少し前の自分のブログから記事を引っ張り出してきて、自分なりに編集して載せてみることにします。

ちょうど「文章の作り方」を、あれこれと考えることが増えてきたので、いいキツカケになるやもしれない、というささやかな抵抗にも似た気持ち（笑）。

時々、「正統派文学！ と感じる文章が読みたい」そう思う時があります。

先日、ネットであちこち見ていたところ。世の中には、私の想像を遥かに上回る志水辰夫・通称シミタツのファンの皆さんが居てくださってて。

どっさり

ネットの中にシミタツ・センテンスを載せていてくれるではないですか！

ラッキーあたし。

ちなみに私個人的には、なぜか少し前に“恋愛小説”として急に売れた「行きずりの街」は初版で読みましたが、全然面白くないです。志水辰夫らしさがほとんどない。無理矢理に、今っぽくなんかしなくてもいいのに！ とプンスカしたのを憶えています。

ただ、やはりそこには商業作家の宿命があると思います。
商業作家であれば

「自分の好きなカテゴリーのものしか書きたくない！ 今、どんなものがウケているのか知らないし興味ない、嫌いだから分析も不要」
これでは、突出した人気は出ない。それはすなわち、「身内以外には」「他人に名前を覚えてもらえない」。結果、誰にも名前を知られずに埋もれて行く、という図式。ただ、「身内」が次々とファンを作ってくれる、ということはあるでしょう。しかしながらそれは決して、一気に千人・万人単位ではないですね。

“多くの人にウケよう” “多くの人の好みに合わせて作品を書こう” と思うと、志水独特の癖のある言い回しが減らざるを得ない。「行きずりの街」よりも前の「情事」でもそうでした。改訂しない方が良かったのに。改訂して、ますます「うーむ」と唸ったワタクシでございました。その辺りから、なんとなく志水辰夫の本を読むのが辛くなって行きました。

頑固親父世代の方なら、頑固にそのまま、私のようなコアなファンと共にいて頂きたかった。こう思うのは勝手なファン心理なのかもしれません。

けど、昔からの志水ファンなら「あんたのすることには、とことん付いて行くぜ！ 心配すんな！」なんて思うのかもしれないですね。

私は最近、また志水辰夫の本が色々と読みたくなってきました。鮭の産卵みたいな感じ？

志水辰夫自身は、公務員や新聞記者の職を経て、四十歳半ばの時に「飢えて狼」が文壇の表舞台に出た作家です。

遅咲きの部類であるかもしれませんがね。（思うんですけど、今の

時代だったら五十歳を過ぎてからの表舞台デビューでも、決して遅くはないんじゃないかと)

プロの作家になりたいと願った頑固なオッサン(オッサンとは失礼な言い方ですが、愛情表現でもあると受け止めてくださったら幸いです)が、渾身の力を込めた「裂けて海峡」が、冒険小説の世界で受け入れられ、そこから徐々に、志水独特の表現が確立されていきます。それに酔いしれたファンは、私一人だけではないでしょう。

いわゆる「志水節」。以下、この段落は、ほとんどネット(<http://www.kyotosanga.org/blog/>)から拾ったコピペになりますが、このブログ主の方は、本当によくまとめていらっしやいました……。

志水節の3大特徴 「背いて故郷より」

- 1) 語尾を少しずつ変えたり、短い体言止めの文章を混ぜたりしながら、緩急の取れたリズムカルな文章を整えていく。
- 2) 客観的な描写のあとに、主観的な描写を唐突に効果的に混ぜ、文章にたるみをつくらない。
- 3) 盛り上がるシーンでは、リズムカルに体言止めを繰り返す<詩的な文章>に変わる。

1) の例文

山裾へ段丘上に築かれた墓地が早くから見えていた。成瀬家の墓地が最上段に位置している。墓地全体が切り石の垣で囲ってあった。

墓石は十ばかり。中にまだ新しい白木の墓標がひとつあって、それが成瀬恵司の墓だった。

2) の例文

1、
窓辺へ立ってガラス戸を開けた。辛うじての雪である。降るとも見せずにわずかに舞っている。掌に受けると触覚も残さず消えていった。風が殆ど動いていなかった。

空に見えない星を感じた。

2、

「また（電話が）かかってくるかもしれません。しばらくわたしのことは伏せておいていただきたいんです。たとえ誰からの問い合わせであれ、知らない、来ていないと」なるべくさりげなく言ったつもりだが少し力みが出た。寿美子がちらと瞼を上げてわたしを見た。彼女は首を振ってうなずいただけだった。
「気をつけて行ってらっしゃい」

彼女が好きだ。

3) の例文

言葉を返せなかった。笑みすら返してやれない。ひきつらせた顔

でただ頭を下げるのみ。うつむき、会釈、身震いをして。背を曲げ、わたしは逃げ出す。行く当てもないひとり影。冬の巡礼、道、その果ての旅。

夜道の向うに明かりがあった。門があつて竹垣があり、笹と椿の生垣いけがきがあつた。庭から松が枝を外へ延ばし、門柱に取り付けて雪洞ほんほり型の門灯。雪に埋もれた小さな門松。

路上にひとり女性が立ちすくんでいた。差し伸べてきて、白い二本の手。

通り抜けた。声もなく、目もなく。

わたしを許すな。その罪を今生償わせてなお許すな。無限の苦しみを課さんがため、永劫わたしを生かしめよ。生きて地獄、果ててなお地獄。貶め、裁き、死してさらにその死体を苔打て。

夜行列車の音が聞こえた。街の光りがほの白く空へ照射している。漂って鐘の音。凍てついて冬の道。冷たい、どこまでも冷たい雪の肌。夜の残影。

音がする。わたしの傍らを歩いている足音がする。

早季子が黙って歩いてくる。

……以上、引用終わり。

私の超個人的な好みで言わせて頂ければ、真冬の札幌、小樽を舞

台に描いた「尋ねて雪か」が痺れるほどに愛おしい一冊です。

しんしんと降り積もる水気を含んだ雪の、かすかな音まで聴こえ
てきそうな文章に憧れます。雪が降ってくる、どんよりした空を見
上げると、視界の隅々まで、重たい灰色の世界に閉じ込められる錯
覚に襲われたことを鮮やかに思い出します。

「尋ねて雪か」この作品を貫く一言は「おにいちゃん、いつしよに
おうちへかえろうよ」！ コレ一択！ べらぼうに涙ダダ漏れしま
す。

当時の会社の後輩に進めたところ、やはり泣いたと言っていました
(笑)。

重苦しく心に迫る雪景色と共に、主人公がどうしても捨てられな
い「かじかんだままの、小さな優しい思い出」「憎んでも憎んでも
癒されない記憶」の心象風景の描写が、主人公の動作の隙間にバス
バスツと入って来るんです。この入れ方が憎い。

昭和臭いと言いたきや言いなさい(笑)、人の心が美しいと感じ
取るものなんて普遍的なもんです。

以下「尋ねて雪か」より七箇所を抜粋。

いつだって故郷を捨てる者は後ろめたい勝利感がある。

雪がまた舞いはじめている。

雪しか見えない。

いつもそつだ。

重く、果てしなく、すべてを呑みつくして雪があった。白と黒、野と山、人と家、単純化された心象の世界。それで表現できない風景があった。それを語りおおせない心があった。

人、それぞれの孤独、それぞれの記憶、ばらばらの生と死。思い出の冬。

雪しか見えなかった。

雪しかなかった。

雪の声しか聞いたことがなかった。

雪が舞う。

いつだって人の心の、荒野に雪が降る。吹き荒れて風だ。ひれ伏して憎悪。さむざむと記憶、過去、なにも生み出さない心象風景。

雪が降る。

黒ずんだ雲を妖しく垂れ下がらせ、空を切り刻んで雪片が頭上に振りかかってくる。雪の言葉はいつだってかぼそいつぶやき。

色を屠^{ほふ}り、音を沈ませ、人の温もりを掠^{かす}め取って雪が降る。広がるのは冬の荒野、人の孤独、海鳴りの轟く闇の呪い。

聞こえてくる。遠く去りゆく木枯らしのような、かぼそい、きれぎれの、泣くような少女の声が聞こえてくる。

「おにいちゃんおうちへかえろつよ」

「みんなでいっしょにくらそうつよ」

雲が流れる。影が落ちる。

闇がどこまでも広がってくる。

雪の底にひとり道に迷っていた。

寒さにふるえ、孤独に怒り、こみ上げてくる力にむなしくなりながら、おまえはいつでもおまえでしかなかった。なにを恐れ、なにを力んでいるのか。恥辱にまみれぬ人生など、未だなかった例しはなかった。

闇をふさぎ、雪を蹴散らし、遠くおどろおどろこだましてくるものがある。

いつかの海鳴りか、それとも荒野を彷徨う物の怪か。

聞こえて言葉。祈っても言葉だ。いつだって残された者の声が追ってくる。

「おにいちゃんおうちへかえろうよ」

「みんなでいっしょにくらそうよ」

帰るところがなかった。

行くところがなかった。

どこにもわが身を置くところがなかった。

未だかつて明けない夜はなかった。

未だかつて人の帰らない家はなかった。

テンプレ展開なラブシーン・いつも二行で終わっちゃう志水辰夫にしては、以下のラブシーンは、珍しいパターンかもしれない。…
…何という清冽なラブシーンなのかと思った一節。

「青に候」より

「たえ殿」

「たえと言つてください」

「たえ殿。それはいけない。聞いてください。わたしは侍になれなかつた人間なんです。かといって百姓にもなれなかつた。一人前の顔をして、えらそうなことをしゃべつたり振る舞つたりしてきまして、自分では一文の金すら稼いだことがない人間なのです。ひたいに汗して働いたことがない。手や腕がかさかさになったり、あかぎれだらけになったりするほど働いたことは一度としてない人間なんです。今日限り侍をやめました。(略)これまでの自分を捨てて、生まれ変わってしまいたいんです。生まれ変わって、それからあなたの前に出てきたいんです」

たえがかぶりを振つた。その笑みがはっきり見えた。

佐平はわななきながらそこへうづくまつた。たえの手がほほを包み込んできた。

佐平はその夜から生まれ変わるための努力をはじめた。

いいつすねえ、いい！ 一所懸命に勇気を振り絞つて自分の汚点を話し、赦しを請う若い男。そしてそれを包む女性の姿。ううん。そして！

やっぱり志水辰夫と言えばコレですよコレ！「裂けて海峡」より。
ラストシーン。ちなみに講談社版。

そばに行くのが少し遅れる。

まだ、し残していることがある。

すませてからそこへ行く。

おまえのために祈っている。

天に星。

地に憎悪。

南溟。八月。わたしの死。

志水節は、一歩間違えると、非常にあざとく古臭い。だが、ちょっと待てど。普通に生活していて、悔しいと思うこと、嬉しいと思うことってヒトとしても、ごくごく当たり前の「泥臭い」「感情なんじゃないだろうか。

そこの辺り、迷わずにズバツと踏み込んでくれる心地よさが好き。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4659x/>

放課後は彼氏と寄り道を

2011年11月2日02時19分発行